

藤原京六条大路の幅員について

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

藤原宮の南面を東西に走る六条大路の幅員については、従来から他の大路よりも幅広である可能性が説かれてきた。藤原京の条坊遺構を整理した井上和人によれば、六条大路の道路規模は、藤原宮第21-1次（1977年度）や第29-7次（1980年度）の調査成果から、側溝心々間60大尺（21.24m）、路面幅50大尺（17.70m）に復原できるという（『古代都城制地割再考』『研究論集Ⅶ』奈良国立文化財研究所 1984年）。またその後、いわゆる「大藤原京」域において実施された橿原市教育委員会の調査で、六条大路と西六坊々間路の交差点の一部が検出された（大久保・東今度遺跡）が、そこで復原された六条大路の規模も、側溝心々間で幅21m強であったという（橿原市教委1991年3月調査）。

このように藤原京六条大路については、側溝心々間約21mの幅を持つことがほぼ定説化しており、側溝心々間約25mの規模を持つ朱雀大路（1976年10月調査）に次ぐ京内有数の条坊道路として、広く注目されることとなった。しかしながら、1996年1月に実施した藤原宮第78-9次調査（本年報で概要を報告）において、六条大路と西一坊大路との交差点が検出されたが、そこでの六条大路は側溝心々間約16mの幅員しか持っていなかった。一方同じ時期、橿原市教育委員会が調査を進めていた右京六・七条四坊の発掘では、下ツ道でもある西四坊大路の東側溝とそれに交わる六条大路の遺構が検出されたが、調査担当者によれば、その規模は溝心々間で約21mに復原できるという（橿原市教委『藤原京右京六・七条四坊現地説明会資料』1996年3月）。ほぼ同時に行われた六条大路の調査で、幅員について二通りの数値が得られたわけである。宮の前面とそれ以外とで、大路の幅員が異なったとも解釈できるが、その場合でも宮前面の方が狭いという奇妙な現象が生じてしまう。何故なら、宮の南面を通る大路ゆえに、他の大路よりも広い幅員を持つと、理解されてきたからである。ではいずれかの解釈に誤りがあるのだろうか？ 以下、六条大路の幅員について再検討を加えてみよう。

藤原京の条坊遺構については、周知のように、道路面そのものを検出することは極めてまれで、道路の両脇に掘られた側溝を確認し、それらに挟まれた範囲を道路遺構として認定することが多い。このため条坊想定位置の発掘で、側溝にふさわしい規模と年代をもつ一対の溝が確認できれば問題はないが、近接してもう一本余分な溝が存在したり、対となるべき側溝が存在しない場合には、条坊遺構の認定に種々の疑問が生じることになる。特に小面積の発掘区の場合には、たとえ想定位置で検出してきた溝であっても、本当にそれが側溝であるとは断定できないし、まして土層観察のみによる判定には、疑問が残る。その意味で、藤原宮第21-1次調査（土層断面による観察調査）や、同第29-7次調査（面積36㎡のトレンチ発掘）の成果にもとづく、幅員の復原には再検討の余地があるようだ。

藤原京の条坊側溝は、交差点部分で、ほぼ一定の方式で交わることが知られている。すなわち、東西道路の南北両側溝は、南北道路の東側溝に横T字形に合流するのに対し、西側溝は逆L字形に西へ折れて東西道路の側溝に接続する。これは東南から西北に向かって下がる地形の影響を受けたもので、一部の例外を除いて、ほぼこの形で交差点の遺構は理解できる。逆に言えば、逆L字形や横T字形に接続する溝が検出されれば、条坊交差点の遺構である可能性が高いことになる。

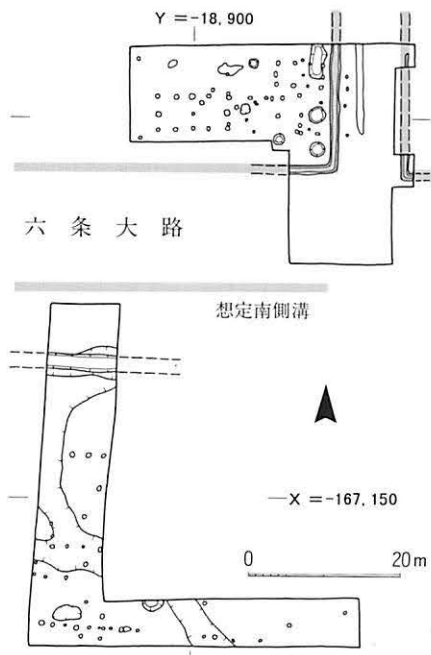
以上の観点から、六条大路関連の従前の遺構を検討すると、大久保・東今戸遺跡においては大路北側溝と坊間路西側溝の交点が、第78-9次調査においては大路南北両側溝と西一坊大路西側溝の交点が、また右京六・七条四坊においては大路北側溝と坊間路西側溝の交点が逆L字形を呈しているから、これらは調査者の想定とおり条坊遺構と見てほぼ誤りない。一方、右京六・七条四坊における六条大路「南側溝」については、西四坊大路東側溝との交点が横T字形に接続しているから、南側溝である

可能性は否定できないが、筆者はその溝の規模があまりにも大きすぎる点に疑問を感じる。なぜなら条坊側溝は、通常、幅2m以下、深さ0.8m以下であるのに対し、この溝は幅約4m、深さ1.2mとはるかに大規模である。側溝と考えるよりは、むしろ物資運搬などの目的で設けられた運河ではなかったのか？

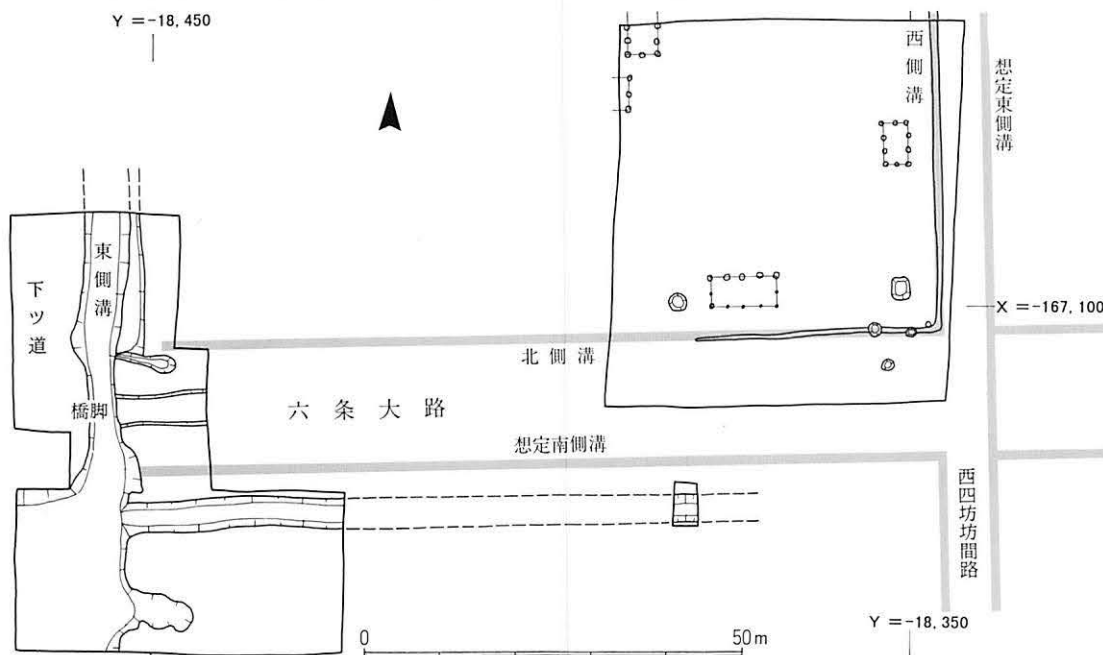
条坊に沿う運河の遺構は、藤原宮大極殿北方（第20次）の調査などで確認されている。この遺構は、宮内先行条坊である朱雀大路東側溝の東約2～3mのところを平行して流れる幅約6～7m、深さ約2mの溝であり、宮の造営工事に関わった大規模な運河の可能性が指摘されている。今、右京六・七条四坊の「南側溝」をこれと同様に運河と考え、その北側2～3mの位置に幅約1.5mほどの南側溝が通っていたと想定すると、六条大路の幅は側溝心々間で約16mとなって、第78-9次調査の成果と整合することになる。では大久保・東今度遺跡はどうか？

この遺跡の場合も、検出された状況からみて、六条大路北側溝はほぼ誤りないものの、調査者が南側溝と想定する溝は、直線部分を8mだけ確認したに止まる。故にこれを、条坊遺構と断定するにはいささか根拠が薄い。その上、北側溝から南16～17m付近は、南北両調査区の間隙に当たり、そこに南側溝が存在する可能性も皆無ではない。21m強の幅員を積極的に主張する根拠は、この調査区でも薄弱なようである。

以上のように、藤原京六条大路の幅員は、従来の想定と異なって、側溝心々間で約16mである可能性が強くなってきた。この約16mという幅員は、他の偶数条坊大路と全く同じ規格であるし、最近発掘された五条大路などの調査成果からすれば、六条大路もまた、設定の基準を道路心に持つことは明らかである。このように考えると、朱雀大路だけが唯一幅員25mという最大規模を誇ることになるが、調査区の狭少さからすれば、これも案外、今後の調査で再検討が必要になるかも知れない。なお文末ながら、榎原市教育委員会齋藤明彦氏のご教示に対し感謝の意を表したい。（黒崎 直）



大久保・東今度遺構平面図 1:1000



右京六・七条四坊遺構平面図 1:1000